

Sawubonani

報告者

ヨハネスブルグ日本人学校
26年度派遣：大垣 正紀

ここヨハネスブルグは一年で一番寒い時期を迎えました。5月末の運動会が終わったあたりから急に冷え込みが厳しくなります。明け方、日本人学校の裏手にはダムがありますが、その影響でしょうか…霧が周辺を覆い尽くしてしまいます。その中を朝日が昇る瞬間、隙間から差し込む光の線が、放射状に延びて、幻想的な光景を見せてくれます。

今年度、ヨハネスブルグ日本人学校は創立50周年の佳節を迎えました。

9月24日（土）には50周年式典記念行事を举行します。式典では、日本人会員、現地教育関係者など多くの方々と共に喜びを分かち合えるよう準備を進めています。

当日の来賓の中には、Orlando（オランダ）孤児院の院長がいらっしゃいます。このオランダ孤児院とは10年以上の交流を続けています。



オランダ孤児院園庭

孤児院のある Soweto（ソウェト）地区は、アパルトヘイト時代に白人により黒人隔離政策地域として区画された地域です。

地名の由来は、“South Western Townships”の短縮名であり、迫害されたアフリカ系住民の象徴の地でもあります。1940年に設立され、1歳未満から15歳以上の子どもたちが常時50名以上、多いときには100名近く生活しています。この孤児院で生活する子どもの、85%親が育児放棄、15%は親がエイズ等で亡くなった子どもたちです。この現実だけを捉えると、悲観的になってしまいますが、実際に子どもたちとふれあう中で見られる目の輝きや、喜びを体いっぱい表現する姿に、私自身が励まされ、この子どもたちのこれからの幸せを願わずにはいられない気持ちになります。

私は、これまで6回、訪問させていただきましたが、院長であるソラニ・ミリアム・マジブコ院長はいつも、笑顔で出迎えてくれます。

施設はとても近代的で、警備体制もしっかりとしていて治安上の問題は感じません。一部施設の壁には日本の現代美術家である日比野克彦氏が孤児院で描いた壁画があり、訪れる度に目を奪われます。

日本人学校とのつながり



日比野氏の壁画

交流内容は、低学年 UNIT と高学年 UNIT に分かれて行います。日本人学校からは、日本の遊びを伝えます。折り紙やお手玉、福笑いにカルタ、児童生徒が手作りで準備したものを紹介しながらふれ合います。

今年度は、趣向を凝らして、「運動会」を行いました。この国に競技としてのスポーツ大会はありますが、日本的な運動会はありません。玉入れ、綱引き、二人三脚など、この国の子どもたちにとっては初めての体験です。慣れない動作に戸惑いながらも、次第にヒートアップし始め、日本の子どもたち以上に盛り上がる様子が見られました。勝つとバック転をするなど体全身で喜びを表現し、負けると悔しくて勝つまで続けるオランダの子どもたちです。

最後は毎年、日本人学校児童生徒による「ヨハネスソーラン」を披露します。最初は静かに見ていたオランダの子どもたちも、やがて、踊りたくてそわそわし始めます。「Let's dance together!」と呼びかけると一斉に飛び出す子どもたち…その中で、日本人学校の子どもたちが教えてあげる光景からも交流学习の意義を感じました。

ソウェト地区の様子



今年の交流は、それでは終わりませんでした。踊りへの御礼として、オランダの子どもたちが現地のダンスを披露してくれました。手拍子をしながら床を踏みリズムカルに踊る様子は、さすがとしか言いようがないくらい素晴らしいものでした。

今年度の交流を終えて、やや寂しさを感じましたが、この子どもたちとの出会いは、決して忘れることはないでしょう。

孤児院周辺には、サッカースタジアム（SAプレミアリーグ所属オランダ・パイレーツのホームスタジアム）あり、大型ショッピングモールありと、これまでのソウェト地区＝貧困地区というイメージは少しずつ払拭されているように思います。ネルソン・マンデラ氏の生家である『マンデラハウス』周辺は、カフェが立ち並び、通りを土産物屋が埋め、観光バスの立ち寄り場所になっています。実際に私も家族で巡りました。赴任当初とから比べると、ショッピングモールで買い物をしたり、休日をレストランで家族と過ごしたりする黒人の方々が増えたように思います。また、街中をバイクや自転車で行き来する人の数も数段増えました。

これまで「世界一危険な都市」「犯罪件数No.1」と言われ続けてきているヨハネスブルグですが、私の目には、アフリカで一番の経済大国として成長し続ける中、活気に溢れ、人々が力強く生きる街として映っています。この街で過ごす時間が、より一層、愛おしく感じるようになりました。



一緒に綱引き



一緒にソーラン



輝く笑顔